

# インタビュー 池上俊一・高山博「西洋中世学の未来」

## 1. 集団的実践

- (1) 『西洋中世史研究入門』と『西洋中世学入門』
- (2) 西洋中世学会

## 2. 個人的実践

- (1) 研究者として
- (2) 教育者として

クリオ：今日はお忙しい中、インタビューに応じていただきありがとうございます。それでは始めさせていただきます。13年前の1995年発刊の『クリオ』第9号で先生方には「西洋中世史研究における2つのパースペクティブ」という表題でインタビューに答えていただいたのですが、その際今日の西洋中世史研究として研究の専門分化と国際化の傾向を指摘されています。それからはや13年経ち、現在、研究の専門分化と国際化はますます勢いを強めております。加えて人文社会系の学問一般が社会的・経済的に不要視され切り捨てられていくという、いわゆる人文社会学の危機といった事態もますます現実のものとなってきています。こうした状況の中、先生方は2000年には名古屋大学教授の佐藤彰一先生と共に『西洋中世史研究入門』を出され、2005年には『西洋中世学入門』を編集出版されております。そして、2008年現在、新たな試みとして先生方を中心に西洋中世学会の立ち上げが計画されていると聞きます。

そこで今日は研究の専門分化、研究の国際化、人文社会学の危機という日本の西洋史研究が現在置かれている状況を踏まえて、それらに対する先生方のアクチュアルな取り組みについて集団的実践の側面と個人的実践の側面の二つからお聞かせいただきたく存じます。

## 1. 集団的実践

### (1) 『西洋中世史研究入門』と『西洋中世学入門』

クリオ：まずは集団的実践の側面から伺いたいと思います。『西洋中世史研究入門』と『西洋中世学入門』をそれぞれ2000年と2005年に出版されていますけれども、それぞれの出版の経緯と意図をお聞かせいただきたいのですが。

池上：まず『西洋中世史研究入門』の方は僕から、『西洋中世学入門』の方は高山さんから話していただくのがいいと思うんですけど、『西洋中世史研究入門』という名古屋大学出版会から出したこの研究入門書出版のきっかけは、僕が昔から付き合いのある名古屋大学出版会の橘宗吾さんという編集者の提案でして、それにすぐ僕が飛びついて、それじゃあやりましたということになりました。おなじ出版社から『西洋近現代史研究入門』（1993年）というのが、既に何年か前に出ていて、近現代史があるならば中世史もあってもいいんじゃないかというのが、お話の直接のきっかけだったと覚えています。でも考えてみるとこのような入門書がない方が不思議なくらいに、その時点で既に日本における西洋中世史というのは多様な研究テーマを追究し、多くの研究者を擁するような規模になっていましたし、これは僕としても当然あってしかるべきだと考えました。

それで学生時代から親しい高山さんと、それからかなり先輩ですけどやはりお付き合いの長い佐藤さんに声をおかけして、三人で相談して作ろうということになりました。それでこの本の特徴というのは、大学院や専門の研究者というよりも学部の学生あるいは専門以外の人で中世に興味を持っていただけそうな人向けという側面が大きいんですけど、もちろん専門の研究者にとっても役立つものにしてほしいとは思いました。それで何回か会議を持ってその構成とか人選を決めていったということです。

高山：では、『西洋中世学入門』の方は、私の方からお話いたします。この本の話が最初に出たのは、私の『中世地中海世界とシチリア王国』（1993年）の出版をお祝いする席でした。東京大学出版会の編集者の方たちが神田で出版をお祝いする会を開いてくれたんですが、その席でヨーロッパ中世史研究について、次のような話をしたんですね。欧米では研究するための道具類や史料に関する情報が整理され、そういうことを教えてくれる書物がたくさんあるし、中世ラテン語を夏休みに集中的に教えるセミナーなど、大学の枠を超えた教育も行われている。だけど、わが国にはそのような研究者間の協力体制がなく、研究者一人一人が個人で一から学習していかなくてはならない。これは、研究者にとっては、非常に大きなハンディキャップであり、日本の研究水準を底上げして、国際的に競争できるようにするためには、どうしても学者の卵が使えるような研究入門書を作っておく必要がある、と。それを聞いた竹中英俊さんが、その企画は時間がかかってもいいから、是非やりましようと言ってくれたんです。その後しばらくはどうしたら実現できるだろうかとあれこれ考えていたんですが、一人で実現できるような企画ではないので、池上さんに声をかけてみました。そしたら、池上さんもそれは是非やろうと言ってくれて、二人でしばらく、数年かかかったんじゃないかなと思いますけれど、本の内容を検討し、構成案を何度も練り直しました。そしてこういう形だったらいけるんじゃないかということまで来て、どなたにお願いするのがいいとか、実現可能性を高めるためにはどうしたらいいとか、わりと具体的な話を始め、東京大学出版会へ構成案をもっていきました。その後は、東京大学出版会の高木宏さんと一緒に内容の調整をし、具体的な段取りを決め、そして、執筆依頼状を送ったというわけです。その後も原稿が出揃うまでに随分と時間がかかりました。結局、足かけ10年ぐらいかかったと思いますが、とにかく出すことができてよかったです。これは、いわば、我々の世代であれば自分で探したり、先輩から個人的に聞いたりして身につけていた道具類や情報を、皆が共有できる形にしようという思いが、形になったものです。この企画の方が『西洋中世史研究入門』よりだいぶ早かったんですが、結局、こっちの方がすごく時間がかかって、出版はずっと遅れてしまいました。

池上：出版されたのは5年の開きがあるわけですよ。しかしやっぱり両者は二つで補い合っているという性格がありますし、出版の5年の差も、無意味ではないでしょう。発案としては『西洋中世学入門』の方が早かったけれどそれを段々形にしていく段階で——出版は『西洋中世史研究入門』に遅れをとることになりましたが——コンセプトが一步進んだと言いますか、つまり「西洋中世史」ではなく「西洋中世学」という……。 「史」というのを取ったんですね。むしろ取れたと言いましょうか。それは5年という歳月で学問を巡る状況や世の中が変わってきて、それがひいては今回の学会を作るという動きにつながっていくのだと、今から遡ればそのように考えられます。しかしこの『西洋中世学入門』では、実際は美術史が入っているだけで文学とか哲学と

か建築とか音楽とか、そういったものはまだ入っていないんですね。『西洋中世学入門』で取り上げられているのは、ほとんどは歴史の補助学なんですけれども、しかし我々の姿勢としては美術史、あるいは歴史図像学を呼び込んだということで、一歩進んだというところがあると思うんですけれど。

高山：そうですね。『西洋中世学入門』は、元々は「西洋中世史」研究者、つまり、歴史研究者の卵を読者対象としていたんですよね。その名残が随所に見てとれると思います。ただ、元々はそうだったけれど、やっぱり出版するまでの10年の間に、この書物の想定する読者や想定する研究者集団が変わっていったんです。学問のあり方として、西洋中世研究には同じ時代、同じ地域を扱うという共通項があるし、見方や分析の仕方は違おうとしても、同じ史料を用い、同じ時代の個人や集団の活動を研究対象とするという共通性がある。従って、「西洋中世史」という具合に歴史に限定するよりも、「西洋中世」を扱う学問ということで「西洋中世学」という括りの方がいいだろうという判断も働いている。もちろん、「西洋中世学 (medieval studies, Mediävistik)」という括り方は欧米では以前から使われてきており、学会としても西洋中世を対象とする研究者集団が作られていましたから、まったく新しい試みというわけではありません。

## (2) 西洋中世学会

クリオ：次に西洋中世学会について伺いたいと思います。最初に伺いたいのはそもそも「西洋中世学」とは何なのかということです。今、池上先生から、『西洋中世学入門』はまだ歴史補助学に留まっているという指摘がありましたように、これからもっと学際性を追求していこうというところがあるのではないかと思うのですが、その際、「西洋中世学」とは具体的にどのような学問領域・ディシプリンをカバーするのでしょうか。この点をまずお聞きしたいと思います。それからもう一つ、「西洋中世」という風に区切っている時間的・空間的枠組みが具体的には何であって、どういう根拠によって区切られているのかということについて伺えたらと思います。

池上：我々は、西洋中世学会というようなものがあればいいと、これも前々から思っていて、ないのが不思議なくらいという気がずっとしていました。しかし我々「弱輩」が逆立ちしても、とてもできそうもないので、もっと偉い先生方が作ってくれるのを30年間くらいずっと待っていたんですけれども、誰もやって下さらないということが段々分かってきました。だから数年前から、一人じゃ無理だけど「同志」である高山さんと二人で発起人になってやればできるかな、ということで少しずつ多くの人に声をかけていって、まあ準備をこれまで重ねて来たわけです。その時に「西洋中世学」というのは、どのような学問領域、ディシプリンかということから我々がこうだという風に明確に提示することはしていないんですね。かなり曖昧な形で示しているつもりです。また時間・空間についてもいけば柔軟性をどこかに確保しておいて、場合によっては将来どんどん広げていき、時代ごとに求められるあるべき姿が変わっていくというスタンスがあると思うんですけれど、まあそういうことに気をつけているということですね。

高山：今の池上さんへの補足と僕の思いをお話します。まず、西洋中世学会のような学会組織がないことによる不都合がいろいろありました。例えば、現状では、日本で西洋中世を研究してい

る人たちの間での情報交換はあまりスムーズに行われていません。また、海外から西洋中世の専門家が来た時に、それを受け入れる西洋中世研究者たちの受け皿もありません。日本から海外に出かける時も、海外の研究者と接触する時も、先生や先輩の個人的な人間関係に頼らざるをえないという現実があります。このような不都合をなくすためには、西洋中世を研究している人たちの組織がどうしても必要だと思うんですね。

さきほどお話しした『西洋中世史研究入門』や『西洋中世学入門』などの教科書・入門書も同じですけど、研究者を育てたり、学問を進めていくための基本的な土台、皆が共有した方がよいものが日本には本当になくて……。このような学会組織もそのひとつなんでしょうね。「西洋中世学会」というような組織が自分たちに必要だということはずっと以前から自覚していたことで、先輩の先生方も「西洋中世(史)研究者の学会がほしいね」、「あったらいいね」とおっしゃっていました。「君たちが何とかしてよ」と言われたこともあります。後輩の研究者たちから、西洋中世研究者の学会が必要だと言われたこともあります。そのような話が出た場では「全くその通りですね」とお答えしてきましたが、池上さんと同じように、とてもじゃないけど自分がやるのは御免だと思っていたんですね。学会を立ち上げるのがどれほど大変かは十分わかっていたつもりですから……。

それなのに、何故学会立ち上げを呼びかけることになったのかと言いますと、そのきっかけはこれまで述べてきた『西洋中世史研究入門』と『西洋中世学入門』の出版だったと思います。この二つの本を出版した後、つまり、『西洋中世学入門』を出版した後なんですが、前からずっと気になっていて誰かがやってくれるとありがたいと思っていたこと、つまり、西洋中世研究者たちの学会を立ち上げる仕事が残っているということを強く意識させられたんですね。10年近くかかった『西洋中世学入門』が出たので気分が高揚していたせいかもしれませんし、その年50歳になるので自分がこれからやるべきこと、やれることを考えていたのかもしれませんが、いずれにせよ、その気分が高揚しているときに、池上さんと学会立ち上げの話をしました。そして、大変だけど、次の世代のためにあと一つだけ一緒に仕事をしようかということになったんです。この機会にやらなければ、自分たちの気力はなくなるだろうし、二人でやることも難しくなるだろう。一人でやるのは無理だけど、二人でだったら何とか頑張れるんじゃないか。とにかくやるだけやってみよう、ということで始めたんです。その後1年近く、二人で学会立ち上げの方法や手順を相談しました。そして、基本方針や手順が固まったところで、数人の方たちに声をおかけしました。その時声をかけたのは、それまでに学会の必要性を発言されたりして、学会立ち上げに積極的に関わってくださるだろうと思った人たちでした。この方たちを核にして、学会立ち上げに協力してくれる人の数を増やし、準備委員という形で、学会の骨格や立ち上げの手順を検討していただくことになりました。分野や年齢のバランスを考えて準備委員を選んだわけではありませんので、専門の偏りは当然ありますし、年齢の偏りもあります。ただ、最初は、学会設立に積極的な人たちが核になって進めないと、途中で空中分解して設立までこぎつけないだろうと心配していたんですね。学会の大まかな骨格ができて、設立までの道筋が見えた頃に、分野やその他のバランスを考慮しながら、準備委員の拡大を行いました。そしてやっと今のところまで来たということなんですね。最初から予想していたことですが、本当に大変でしたし、これからも乗り越えなければならない山がいくつもあります。二人とも、西洋中世に関心のある人は誰でも、あまり不快感を感じずに活動ができる学会にしたいという思いがありましたので、イデオロギーや政治性は排除し、違った考えを持っている人たちに広く協力をお願いしなくてはならないと思っています。

ました。だから手間はかかりますが、民主的な手続きを重視すると同時に、できるだけワーキング・グループや準備委員の間で議論していただいて、それをもとに全体の意思決定を行うよう努めてきたつもりです。

西洋中世という枠組みについては、次のように考えています。ヨーロッパ中世や西洋中世は、最初は誰かが作り、その後広く使われるようになった言葉のひとつにすぎない。それを概念と言っているのかもしれないけれど……。ヨーロッパや西洋は地理的な場所を示す言葉で、中世は時代を示す言葉だけれども、それぞれの言葉の歴史を辿れば、使われる地域・時代により、指し示す意味領域に偏差・変動があるのは明らかです。つまり、「西洋」も「ヨーロッパ」も、「中世」も、固定し限定された特定の地域・時間を指しているわけではありません。日本語の「西洋」「中世」は、ある過去の時点から現在まで受け継がれてきた言葉ですが、それぞれの言葉が一对一の関係である概念を指し示していると言うことはできても、過去の現実の何かを一对一の関係で指し示しているというわけではありません。私たちは、今使われている西洋と中世という言葉で、たとえその意味領域は使う人によって異なるかもしれないけれど、ある地域と時代を大きく限定しているにすぎないということだと思います。このことは、「西洋中世学会」の場合にも『西洋中世学入門』の場合にも、当てはまります。もちろん、このような括り方をするということは、その地域、時代を研究するにあたって共有できるようなものがあるという前提に立っています。厳密に言えば、そのような前提を立てていいのかどうか疑わしいのですが、便宜的に立てることは有益なんじゃないかと思えます。

クリオ：今、伺った感じでは、例えば個人が情報交換をしたいという形でアクセスしてそこから何かを得たり、いろんな分野の集団が集まってそこで全く自分が知らないような分野を研究している人と出会ったりする場というイメージがあるのですが、集まって知らない人と会って情報交換するという場を提供する以上の何か具体的な活動が想定されているのであれば、伺いたいのですが。例えば具体的な活動として学会大会などを定期的に関くかどうかについてはまだ伺っていませんが、もし大会などを開くとして、そうした場で何かを一緒に作っていったり、端的に言えば総合すると言いますか西洋中世学という一つの学問で集まって、集団的に何かを作っていくということは考えておられるのでしょうか？

高山：学会の行事としては、大会や研究会を開き、雑誌を出す予定です。集団的に何かを作っていくのかという点に関しては、僕の考えが池上さんと同じかどうかは分かりませんが、僕自身は集団で何かを作りたいとか、西洋中世学というディシプリンめいたものを作りたいという欲求はありません。自分のやっている学問は基本的に個人でやっていくものだと思っていますし、他の人たちに自分の問題関心や枠組み、価値観を押しつけたくはありませんから。これは僕の個人的な指向であって、共同研究や共同作業が必要ないと言うつもりはまったくありません。ただ、多くの時間とエネルギーを使って学会を作ろうとしているのは、さきほど述べたように、ないと困るからであり、お互いに刺激をもらったり、情報交換をするなど、研究者に大きなメリットがあると思っているからです。西洋中世学会は、最低限、皆が情報交換して刺激を得られる場であってほしいし、お互いに利益を得ることのできる組織であってほしいと思っています。そして、それが、大方の人にとって受け入れることのできるボトムラインではないかという気がしています。それ以上のところは、つまり、集団的な活動の成果というようなことも含めて、学会に何を期待

するかは人によって違うのではないのでしょうか。より具体的な成果を求めて積極的に活動したい人もいるでしょうし、刺激や情報交換だけで十分だという人もいるでしょう。それは、個人の問題じゃないかと思いますが、どうですか？

池上：まあ、個人の問題と言ってもいいんですけど、この学会は今の予定では年一回二日間かけて大会を開くわけですね。それでその大会では必ず学際的な色彩のある魅力的なシンポジウムを開くということはもう決まっているんです。それからそれと同じテーマでの論文の特集をその直後の学会誌に載せるということももう決めているんですね。後どうということが予定されているのかというと、研究会や講演会、あるいは若手支援セミナーというものが計画されていて、それについても必ずしも歴史の人だけではなくて可能ならば歴史以外の人も参加できるようなものにしていこうと。ヴァーチャルな広場としてのホームページももちろん構築しつつあり、大いに可能性のある情報提供・交流の場にしていくつもりです。他には、国際交流、これはまだはつきりとは決まっていなくても、いろんな形の国際交流も進めていこうというわけですね。

もちろん、最終的には個人が個人として研究を進めていくわけですが、この学会ではそれぞれの分野の中世研究者が、他ではなかなか手に入りにくいような他分野の情報を手に入れて情報交換することができますし、人脈を築くことも可能です。しかしそれ以上に、望むらくは、特にこれは大会や学会誌の特集に象徴的に表れているんですが、そういう「場」に会して様々なディシプリンや様々なテーマ、地域、時代を専門とする中世研究者と一緒にやるということで、個人でやっていたのでは見えないことが見えてくるとか、あるいはある種の総合的なビジョンがそこに打ち出されるとか、そういう一種の化学反応と言いますか、その一つ一つの元素というか物質だけでは考えられもしなかったような化学反応で何か新たな学問世界が生まれてくるとかいうことがあれば非常にいいと思っています。しかしそれがどういふものか、初めに決めてしまって、そこに皆が向かっていく、ということではなく、経験的に試行錯誤しながら創られていく世界です。その意味では高山さんと同じとも言えるけど多少違うとも言えると思うんですけど。

クリオ：今、学会誌という言葉がありましたけれど、これは西洋中世学会で独自の雑誌を出すということですか？

高山：そうです。西洋中世学会独自の雑誌を出す予定です。

クリオ：学会誌についてですけども、二点お聞きしたいことがあります。まだ、はつきりと決まっていないことなのかもしれませんが、まず伺いたいのが言語についてでして、何語でその学会誌が作られるのかを伺いたいと思います。もう一つは内容についてですが、シンポジウムを通して出た成果を発表するだけに留まるのか、あるいは西洋中世学という枠組みの中で美術史なり何なりという形で個別の論文も扱うのかをお聞きかせたいのですが。

高山：まず学会が発足した年に和文の学会誌第一号が出ます。その後、毎年一冊ずつ出る予定です。欧文雑誌刊行の計画もありますが、これは学会が発足した後にワーキング・グループを作って、そこで検討する予定です。学会誌の内容は、学会大会のシンポジウムと連動した特集論文、投稿論文、新刊紹介、研究会報告・案内などです。普通の学会誌とだいたい同じような体裁にな

るんじゃないかと思います。

池上：あと歴史だけでなくいろんな中世学に関わる分野の博士論文関係の情報を載せようということもほぼ決まっていますね。日本各地の大学で最近ではどんどん博士論文が出ていますが、そういうものの情報も載せたらどうかということになっています。今のところ決まっているのはそれぐらいなのですが、今後学会が発足したら、新たな展開もありえますよね。僕の個人的な希望では、この学会を中心としたいろんな出版計画もあるといいかもしれないと思っています。例えば何年か前にジェンダー史学会という学会ができて、マイナーな学会だと思っていたんですけど、それが明石書店から全八巻の叢書を出すそうです。で、まあそういうようなものも将来あればいいかなとは思っているんですけど。

クリオ：もう一つ、今の中世学会の活動について伺いたいのですけど、二日間の大会というのは、一日がシンポジウム、もう一日が個別研究報告という風に考えていいのでしょうか？

高山：そうです。

池上：それで個別報告なんだけれども、初めの何年かはあまり細かな部屋（部会）に分かれるのではなくて、全員がすべて聞く、ということにしました。だから発表の数は限られてしまうかもしれないけれど、歴史研究者も中世哲学の話や中世文学の話も聞いて、何らかの反応をするという、まあ、そういうことです。

クリオ：ありがとうございます。それでは一応、ここで集団的実践の話というのは一区切りしまして、次に個人的実践についてお聞かせいただきたく思います。

## 2 個人的実践

### (1) 研究者として

クリオ：まず冒頭でも述べましたけれども専門分化や個別実証主義の強まりというものをどのようにお考えになっているのか、ということをお聞かせいただきたく思います。

池上：これはあの、なんていいますか、必然といえますか、まあ仕方ないし、いいんじゃないですか。いいんじゃないですか僕が言うのも変だけれども、これ自体は否定しないし、まあ、仕方ない。でもそれを補うものも必要だって思うんですけども……。専門分化して個別実証主義……。うん、まあ……。仕方ないよね。

高山：学問の精度を上げるためには、どうしようもないっていうか……。人間の能力に限界があり、すべてを一人でやることはできないわけだから、専門分化や個別実証主義が強まるのは当然の動きではないかと思っています。非常に単純化して言えば、例えば、ある時代・地域の状況を知りたいって思った時に、一人でその地域全体を調査するのと地域を分割して複数の人が調査するのではスピードも情報の蓄積量も全然違う。それから、ある人はある側面からある手法を使っ

て過去の社会を見ようとし、別の人は別の側面から別の手法を使って同じ過去の社会を見ようとする。それらが重なることによって、より現実に近い過去の社会が見えてくる。そのように考えれば、専門分化、個別実証主義の強まりってというのはある種必然的な流れと言えるのではないのでしょうか。しかし、もちろん、同じ西洋中世研究者でありながら、隣の研究者がやっていることがまったくわからないという状況になってしまうのは、問題ですね。

学問の世界では、自分の研究成果が他の研究者たちに共有されなければ意味がないし、存在しないのと同じなんです。だから、研究成果を他の研究者たちが理解できる形にしなければならぬ。一人で研究して新しいことがわかったとしても、それがその人にしか理解できないということであれば、意味も価値もないことになってしまう。つまり、自分の研究がどんなに専門化して個別実証主義になっていようと、その研究成果をきちんと説明し、周りの研究者たちが理解し共有できるような形にしなければならぬ。専門分化や個別実証主義に対する批判がなされるのは、それがきちんとできていないからではないかと思います。

池上：あと、細かな研究、個別実証主義的な研究も、何のためにやるのかってということが重要ですよ。だから、何のためにそれを調べて、探求しているのかという反省をどこかでしながら、進めないといけぬ。その何のためにかっていうことはどういう風に考えるかということ、僕は常に「全体」というもののイメージを抱きながら、個別的な研究をしたいと念じています。良い論文ってというのはどういうのかといえば、いくら細かなことをやっても何かそこから新しいパースペクティブが開けるような気がする。あるいはまあそういったものをつながっている。鋭いメスで硬くなった分厚い皮を切り開いて、そこから新しい世界が見えるような、そういう論文に出会うと、まあ感動するわけですよ。だから自分のやっている研究が、いくら細かな個別実証研究でもいいけれど、それがどういうパースペクティブを開きうるか、どういう全体につながっているかっていうビジョンを持ちながらやらないといけぬと思います。いまだかつて誰も言っていないようなことをいったらそれでいいのか、ということになってしまうので。例えばナポレオンが何月何日に何を食べたのかってことを調べるにしても、それが何か意味があることならばいいのだけれど、そこまで調べて意味のないものは、やる意味がないわけですよ。

高山：今の話に加えると、ある研究に意味があるかないかは、問題関心や問題の立て方、枠組みによって、変わってくるわけでしょう。ある問題関心からすればほとんど意味がないようにみえるけれど、別の見方とか枠組みの中では、俄然それが意味を持つてることがありうるわけですよ。

それから、池上さんがおっしゃった「全体」っていうのは、ある意味では、過去の社会——わかりやすい例として出しますけれど——、それをある種一体的なものとして認識している。つまり、抽象化した「統一体」として認識しているわけですよ。通常、私たちはそういう抽象化されたものを、言葉によってだけでも、過去から受け継いできている。そのような過去からの遺産——そこに研究者たちの成果も含まれているのだけれど——をもらって、過去のさまざまな事象に対する抽象化されたイメージを作っている。

私たち研究者は、そのような過去に関する共有されたイメージや情報を一方に持ちながら、他方では、自分の研究として、過去の社会や人間活動に関する非常に限定された研究——ここでいうなら個別実証主義ですね——を行っている。そして、自分の研究の進展に応じて、共有された



イメージや情報を修正しているんですね。つまり、私たち研究者は、過去から受け継いでいるある過去の社会のイメージ、あるいは、何らかの統一体のイメージ——ほんとは統一体があるかどうかともわからないけれど、仮にあるとして——によって過去を認識し、自らの研究によってそれを修正し続けているんですね。

池上：で、それを、意味があつて良い研究だつて誰が言ってくれるかつていうと、それはいくら自分一人で叫んでもダメなわけですよ。そうするとそこでまず最初に研究者集団、あるいは学界つていうものが機能してくる。つまり、歴史家は一人で歴史家でありうるともいえるかもしれないけれど、やっぱり、こつちの本（『西洋中世学入門』）の序文にも書いた記憶があるけれど、やっぱりある種の共同社会の中で、いわば連帯してるということをどこかで考えておかないと変なところに行ってしまうですね。だからその、そういう意味ではこういう西洋中世学会というのも新たなそういう評価の団体、共同体になりうるかもしれないという風にも思います。でももうちょっと別の観点から考えると、ある研究が非常に意味のある研究だということが、ごく小さな専門家集団にしかわからないつていうこともあるけれど、しかしその専門家集団にはわからないけれど世間の人には分かるつていうこともあります。いわば——別に一般受けするようなことを言えはいいということではないですけども——専門家集団とともに、歴史家は彼の生きる同時代の人々・民衆、その両方に軸足を置いた研究をすべきだつてというのが僕の思いなんですけど。

クリオ：個別実証研究・専門分化は、科学の進歩の必然であつて、ただデータの収集それ自身が目的となつてしまつてはいけません。

高山：うんうん。

クリオ：その場合、先生方が実証的な手続きを踏まえて抽出されたデータを、自分だけのデータ収集に陥らないで、バランスの取れた論文や著作の形に仕上げる際に、具体的にどのような実践をされているのか、お話しいただければと思うのですが。

高山：まず、データについてですけど、関心のない人にとってはただの情報の集積にしかすぎなくても、それが別の人にとっては大変な宝物になるということがありますよね。データの価値や意味は、そこに含まれている情報を誰が評価するか、誰がほしいと思つているかによつて違つてくる。

ただ、データの価値を判断する上で不可欠の要素が、そのデータの正確さであるということはいえるでしょうね。つまり、データが正確であればあるほど、過去の現実により近いと判断されればされるほど、その価値は高く評価されることになる。たとえ無味乾燥で単純な数字の羅列であっても、それが正確な情報であれば、蓄積されることによつて、これまでわからなかつた過去の現実の一面を映し出してくれる可能性がある。しかし、いい加減な情報や不正確なデータは、いくら蓄積されても、過去の現実を見せてくれるわけではない。ただのデータ収集にしか見えない研究であっても、過去の現実をより正確に示してくれるような新しい情報を集めてくれているのであれば、その研究は大いに意味があるのではないかと私は思つています。

他方、研究を進めていく上で——もちろん、論文や書物を書く場合もそうですが——重要な

は、人間の想像力ですね。収集したデータ、例えば数字の羅列が、直接過去を見せてくれるわけではありませんから……。その数字が意味をもち、過去の現実の一側面を見せてくれるためには、研究者の想像力の媒介が必要なんです。想像力が貧弱だったら、データから過去の現実がなかなか見えてこない。実際には、私たちは、常に、過去の現実を想像しながら研究を進めているわけですから、想像力が貧弱だったらお手上げかもしれませんね。また、より正確に過去を認識できる能力ということでは、洞察力が問題になるでしょうが、ただ、このような能力はね、本当になんていうのかな、その人の経験とか、それからスキルとか、いろんなものを含んだ総合的な判断力でしょう。これは、その正確な判断ができるような、正確に過去を想像できるような力を個人で高めるしかないんだけど……。でも、それは難しい。短期間の学習や教育によって伸ばすことのできる能力とは違うから、ある意味ではどうしようもない(笑)。だから、そのような能力に頼る研究は、個人差が大きくなってしまふ。その点、情報収集や整理、データベース作成の方が、ある程度の訓練を積めば、個人差の少ない意味のある成果を出せるのかもしれないね。

クリオ：今、客観的なデータの蓄積に加えて、想像力の話が出ましたが、そこで先生が実践されているような例えば比較史の方法であるとか、そういった方法論についても、お話を伺いたいと思います。

高山：まず情報というか、史料についての話をしておきたいと思います。私たちの周りにはさまざまな情報がありますが、正確な情報を選別するためには、可能なかぎり情報源に遡って検討する必要がありますよね。歴史研究では、オリジナル史料が存在しているんだったらオリジナル史料まで遡るといのが正道っていうか一番確実な方法ですね。オリジナル史料(情報源)から私たちへ情報が伝わる過程で次々といろんな——『西洋中世学入門』の序論にも書いてますけど——いろんな人間の認識のフィルターがかかるわけですから、私たちの所へ届いた情報はもとの情報とだいぶ違ってくる。だから、可能なかぎり情報の源に遡っていくのが鉄則だと思うんですよ。もちろん、実際には、いつもそれができるわけじゃないんだけど……。だけれど、それが一番望ましい。私たちが研究対象としている過去に最も近い史料を通して、過去を見る、それが一番間違わない方法だと思います。これは、技術があれば誰でもできることから……。とにかく、一番のおおもとの史料までたどり着いて、それをもとに考えるっていうことですね。

さて、比較史についてですが、比較はね、ものすごく難しいんですね。比較する場合、通常は、これまでの研究者が過去に関して調べた情報を使うわけじゃないですか。しかし、それらの情報のほとんどは、今お話ししたように、最初の情報源から何人もの研究者の認識のフィルターを通過して伝わり、抽象化されたものなんですね。私たちは、過去の二つの社会や現象、人間活動を並べれば比較ができると思いがちなんです、そんなことは全然なくて……。過去に関する情報というのは、ある集団の知的伝統というか継承されてきた関心とか枠組みとか、そういうものの中で抽出されてきたものですから、異なる集団に属する二つの情報を単純に並べて比較しても意味がないんですね。

意味のある比較を行うためには、それぞれの情報を一度源のところまで辿り、それが記された文脈に返してあげなければならない。つまり、私たちのところまで辿りついた情報が、源のところ、つまり、過去の現実にもっと近いところにある史料でどう書かれていたかを確認しなければならぬ。どういう史料が情報源になっているかを調べ、その史料を検討すると、問題となってい

る情報が記された背景・文脈も見えてくる。そして、研究者たちのフィルターによる偏光も、つまり、史料の中にある情報がどういう経緯を経て抽象化されてきたのかが分かってくる。そのような作業を進めると——その背景を含めてね——比較するということがかなり可能になってくると思うんですよ。歴史的な現象を比較しようとする場合は、その比較しようと思っている対象——より厳密には対象に関する情報ですが——、その対象を、一度過去の文脈の中に返してあげないといけない。だから、比較は非常に大変なんですね。

池上：その場合に例えば、一見比較できるように思って調べてみると、随分比較しがたいもので・・・。

高山：そうそう。

池上：比較のしようがないってということがどんどん出てきちゃうってことが・・・。

高山：ありますね。比較しようと思っていたものが——研究者の書いたものを見るとこれは比較できそうだと思って調べていくと——全然比較できないということがありますね。一見比較可能に見えるけれど、実は比較の対象物として適切でないということなんでしょうね。

池上：一方で、逆のこともある。

高山：それもあります。比較できないと思っていたものが比較できることがある。

クリオ：比較というのは、一番単純なところでは史料の欠如を補うための補助線として使用されますし、ヴァリエーションを発見する手段としても使われます。あるいは、戦後歴史学の枠組みの中で使われてきたように、普遍性というか、ある軸の中での共通項を探す手段ともなります。先生にとって比較の目的というのは何なのでしょうか？

高山：僕にとって、認識の基本的な仕方はほとんど比較なんではないかと思います。つまり、二つのものとか二つの事柄、二つの事象を、並べることによってその差異が見えてきますよね。僕の認識の仕方っていうのはおそらく、そういう差異を集積して、そして抽象化していくんだと思うんですね。史料を読んでも、そこに出てくる言葉や事件、出来事を、無意識のうちに別の所に出てくる言葉や事件、出来事と比較しているんですね。言葉の使われ方が違うとか、人々の行動パターンが違うとかですけれど・・・。

そのような個別の事象の違いが集積されてくると、ある集団と別の集団における事象の違いを見ようとするんですね。つまり、差異を集積していったてそれであるカテゴライズをしているように思います。他の人たちと大きな差異をもつ集団を一つの集団と捉えるということですね。例えば、単純な例として、バイウルス (*baïulus*) というラテン語で示される王の役人を挙げてみます。ラテン語のバイウルスという言葉そのものは、さまざまな使われ方をしますが、中世フランス王の役人であるバイウルスに限定しても、単なる所領の管理人から地方行政の中心であるバイイまで、さまざまな役人をさします。王国内の地域による違いもあるわけですね。しかし、私たちは、そのような地域的差異を認めながら、中世フランス王のバイウルスを抽象化して理解しようとし

ます。同様に、やはり地域的差異を含む中世イングランド王のバイウルスを抽象化して理解しようとしています。時代による変化も抽象化しながら、理解しようとしています。そして、そのような抽象化された中世フランス王のバイウルスと中世イングランド王のバイウルスを比較するわけですね。これが一つの比較です。しかし、さきほど述べたように、このような道筋で抽象化したものを比較すると、現実から大きく乖離する可能性があります。その乖離を避けるためには、フランス王とイングランド王の、個々のバイウルスを一度同じレベルに並べて、それらをカテゴライズしなおさなければならない。つまり、一度、フランス王やイングランド王という枠組みを取り払って、地域や別の指標によって分けられたバイウルスを比較する、という道もあるわけですね。このようにして、つまり、バイウルスの差異を通してフランス王国やイングランド王国を見るわけですね。僕の場合は、そういう風に認識していくんですよ。だから常に差異を意識し、常に比較を行っているわけですね。比較の対象を大きくとればとるほど、広げれば広げるほど、大変になっていく。

だから、例えば、ヨーロッパとイスラム世界の比較は、無謀なくらい大きな比較なんだけれど、ヨーロッパとイスラム世界を知るためにはどうしても必要な作業なんですね。強調しておきますが、比較するときに非常に重要なのは、比較する対象を限定する枠組みだということです。ヨーロッパという枠組みとイスラム世界という枠組み、あるいは、イングランド王国という枠組みとフランス王国という枠組みですね。これらの枠組みが何であるのかをきちんと自覚しておかないと、何を比較しているかわからなくなりますからね。

クリオ：ありがとうございます。いま高山先生から比較という方法についていづらか詳しく伺いましたので、今度は池上先生にお尋ねしたいと思います。最近、先生は『ヨーロッパ中世の宗教運動』（2007年）という大変大部な本を著されました。これは多くの研究文献を駆使し、ヨーロッパ中世の霊性というものに関しての通事的見通しを与えるような試みだと感じたのですが、この執筆作業というか研究作業の中で、先生が実践された方法論について、伺いたいのですが。

池上：まあ、僕としてももちろん、いま高山さんがおっしゃったように、歴史家の仕事として、正確な史料から正確なデータを抽出して、そういったものをもとに歴史を築いていくっていう、それは当然必要であろうと思っています。しかしその一方で、いろんな想像力の働き——それはなかなか人に教えたり方法として定式化できないっていう話でしたけど——そっちもそれに劣らず重要で、まあ両方が無いと歴史学っていうのは成り立たないと思うんですけど。そのなかでも、例えば中世というのはどういう時代なんだと直截的に問われて、ちゃんと答えられる人が今の中世史研究者の中にどれくらいいるだろうかということもありますよね。例えば19世紀～20世紀前半くらいまでの歴史家ならそれぞれ答えられたと思うんですけど、さっき言った専門分化や個別実証主義の強まりとともになかなかそういうことが言いにくい、あるいは言うのが怖い、そういうことになってると思うんですね。でもそれじゃダメだと思います。それは常に自力で考えていくべきものであるし、僕としても、できれば自分でそういうものを考えて打ち出していきたいというのは、まあ当初から願望としてありました。ですから、高山さんが比較史的方法を実践する中で行っているように、例えば史料の持ち合わせている一つ一つの言葉っていうか概念をおおもとまで、マニユスクリプトまで遡るといことが、とても大事なことはよく理解していますし、僕自身も、少しずつやっているつもりです。この『ロマネスク世界論』（1999年）や『ヨーロ

『中世の宗教運動』に関しては、もちろん史料も大量に使ってはいるんですけど、それは既に校訂されたものを信用して使っていますし、また研究文献にもかなり依拠しながらまとめました。それを、史料の源泉まで遡るといふ観点から、弱点と批判されれば仕方ありません。しかしこれらの書物は、僕なり的一种の全体史であり、僕なりに見た中世っていうのはどういう世界かっていうことを打ち出したつもりです。これは、なんていうか歴史学というのがもしかしたら他の学問と違うところかも知れないんですけど、歴史学は学問でありながら歴史＝物語であり、だから歴史というのには誰もが、つまり専門の歴史研究者のみならずある社会・地域における誰もが考えられる、あるいは誰にも関わる知だと思ふんです。それは他の、例えば社会学とか哲学とは違うところではないでしょうか。そういう——これはさっき言ったこととも関わるけど——研究者集団としての例えば学会なりより小さな専門の集団なりというものに軸足を置くということと、今我々が生きているこの世界、世の中に軸足を置くっていう両方が必要で、いまのところ、僕の研究がどちらかという一般向けではないかと批判する人がいるかもしれませんが、僕は、今言った両方の共同体を、いつも両輪にしようと思っています。もちろん、一般人にはまったく理解できないような、細かく専門的で、しかも誰も指一本触れられないような完成度の高い研究もやりたいとは、常に思ってるんですけど(笑)。そこはなかなかやる時間がないんですけど。

それであと、方法論ですか。もちろんその、なんていうか、僕は一種の観念論的な傾向があるのかもしれないけれど、まあとにかく「心的世界」っていうものから考える習性があります。つまり他のもろもろの制度とか社会構造とか、あるいはさらに最近流行の史料論が対象とする史料の作られ方でもいいですけど、これらすべては、それぞれの時代の心的世界のある局面での現れに過ぎない、あるいはその堆積物に過ぎないのではないかと。常に心的な世界っていうのがまずあって、だから全体史を考える場合はそれを基準に考えていくっていうこと。そのようにすると、なんていうかその、例えば中世のある時代、まあロマネスク期ならロマネスク期の集会的な心的世界っていうものと、我々、あるいは今日本の東京で生きている僕の個人的な心的世界っていうものの、ある交流の仕方というものを考えることにもなって——これはもしかしたら歴史学のあり方についての態度表明になるかもしれないけど——それをいろいろ、心理学とか社会心理学とか人類学とか歴史哲学とか、いろんな隣接科学も多少勉強しながら、ある種の定式化ができないか、方法として編み上げられないかって考えてはいるんですけど、まだ……。ですからそれはまだ自分でしっかり理論化できてないんですけども、一言でいうと「歴史の詩学」とでも言うべきものの、僕なりの具体化が、今までの主要な二冊の本になっていると思うんです。で、僕と高山さんのやり方は、違うといえば水と油のように随分違っていますが、でもまあ大昔から仲良くやってるんです。しかし考えようによっては、この水と油のように違う方法論というか、歴史学への態度は、裏表のものかもしれないし、そうではなく丁度よく相補いあうものかもしれない、というふうに考えています。まあ、そのへんのところが、今後の僕の課題でもあるんですけど。

クリオ：今、池上先生が最後に、これからの課題かもしれないとおっしゃったのは、例えば、この本（『ヨーロッパ中世の宗教運動』）の中で、カタリ派について、南仏の社会との関連で論じてりしている、そのへんをもうちょっと深めていくとか、そういう方向性ということになるのでしょうか。

池上：そういう方向性と、それから僕がやっているようなことを、高山さんのような手法でやる

ということですよ。一人でやると千年間くらいかかりそうなので、とても寿命のある間にできそうもないのですけど。ですから、共同研究的にそういうことをやれるのかもしれないなど。そういう気持はありますけどね。

高山：たぶん、歴史をやっている人には、両方の側面があると思うんですよ。一つは、過去の現実を知ろうとする過程で、すごく細かい作業しなくちゃいけないじゃないですか。文字が判読できないような羊皮紙を読んでいくというような作業を。そうすると、史料を読むためにいろいろな技術を身につけないといけないし、生の史料を探すためには、これまたものすごい手間をかけなくちゃならない。だけども、その一枚の羊皮紙の中身を知るだけでも、大きな喜びを味わうことができるんですよ。それは、目の前にあるよく分からなかったものが、分るようになったという喜びかもしれないし、未知の世界を知る喜びかもしれない。もしかしたら、その喜びはね、私たちが研究対象とする過去の社会とは、切れているかもしれませんね。ある人たちはその喜びにのめりこんでいて、古文書学や古書体学の専門家になるのかもしれない。羊皮紙を研究する専門家集団にも、知の蓄積があるわけですね。

歴史研究者の場合は、どれほど極小的な現実であろうと、史料を通して過去のある現実に近いところとしているのではないかと思います。ただ、池上さんが言っているように、他方で、もっと広い大きな所を見渡したいという欲求もあるわけですね。しかし、大きく広げれば、細かいところをやる時のように、ものすごく狭い穴をあけて、向こうまで突き刺すような研究はなかなかできないわけです。結局、他の研究者たちの仕事に頼るしかないわけです。そうすると、研究者の仕事を見分ける力がすごく大事になってくる。信用できる研究者とか信用できる研究を、きちんと選別できることが重要で、信頼できないデータや創造力によってねつ造されたデータを使ってしまったら、その研究はまったく信用できなくなりますからね。

繰り返しますが、多くの研究者は広い所を認識したいという欲求と、非常に細かいところに限定して精度の高い研究をしたいという欲求の両方を持っているし、社会的にも学問的にも両方要求されているようなところがあります。ある時代の羊皮紙ばかり読んでいる研究では満足できない人があるのは当然ですし、もうちょっと広くな、例えば12世紀の西ヨーロッパはどのような時代でしたかって質問されて、自分なりにあるイメージを持って答えたいと思っている人も多くいるはずですからね。

クリオ：今、先生がおっしゃったように、大きなビジョンで歴史の実体を捉えるということと個別的に情報の精度を高めていくということの二側面があるということですが、比較史の話をお先ほど伺った感じでは、私の印象が間違っているかもしれませんが、高山先生にとっての比較は、情報の精度を上げる手段であると感じたのですが、しっかり、細かく差異を認識して、情報の精度を上げていく手段である。一方で、これまでの「比較史」というのは、ヒンツェなりウェーバーなりを見れば分かるように、精度は落ちるかもしれませんが大きなビジョンを得るために多用されてきた側面があると思います。こうした側面で、先生なりに意識されていることがあればお聞きしたいのですが。

高山：ウェーバーにしてもヒンツェにしても、ある程度の意識はしていますね。さっき言った比較という意味で、彼らの仕事がどれくらいできているのかなという疑問はずっと持ち続けていま

す。おそらく、僕が比較の本を書くとしたら、彼らの見方を正すようなものでないとダメだと思います。ある種のフィルターを経て蓄積されてきたイメージというものに基づいて、あるいはその前提の上で、何かを積み上げるということは、やりたくないと思うんです。それじゃ、自分がやる意味がないから。彼らが作り出してきたものを修正しようと努力するんじゃないかと思えます。

クリオ：そこで、比較史や全体史について、池上先生にお聞きしたいと思います。『ロマネスク世界論』は、一つの時代・空間を限定した構造論で、「思考」や「感覚」や「靈性」といった諸要素を提示されています。そして、『ヨーロッパ中世の宗教運動』については、「靈性」という一つの概念に特化して、ヨーロッパという地理的枠組みの中で、時間軸で靈性の展開を追っていく通史の試みだと思うのですが、その「靈性」概念も、「禁欲主義」などいくつかの下位の諸要素から構成されており、その布置の変化を追うことで、同一でありながら変化していく「靈性」の変遷をえぐり出すという手法をとられています。いずれも、幾つかの要素を具体的に出されて論を展開されていますが、混沌の中から、どのようにこれらの諸要素を取捨選択し、有効性を見極め、採用されているのでしょうか。それは、恐らく現在日本で生きておられる先生ご自身の心的世界と向き合うことと無関係ではないと思うのですが。

池上：そうですね。例えば、論文を書く場合でも、本を書く場合でも、ある物語なり、あるパースペクティブなり、あるメッセージなりを、明確に打ち出さないといけないと思っています。はっきりした主張が打ち出せる方がいいと思いながら、いつも考えているのですが、最終的にどういう形でまとまるかということは、初めから分かっていたわけではないんですね。それは、誰がどういう研究をする場合でもそうだと思うんですけど。これは比較ではないのだけれど、いろんな宗教運動を水平的に並べて、あと立体的に時間軸でも並べて、それを、それこそ全体を頭のなかの立体的座標軸に放り込んで見渡しながら、瞑想していると、ちょっと閃いたりするわけですよね。その閃きがどうやって出てくるかということは、自分ではよく分らないのですが、三回くらい閃くと、まとまるかなって感じがですね。一回閃いただけでは、どっかが崩れていて、破綻するんですけど、三回くらい閃くと、まとまったビジョンができるという感じですかね。それが、今の自分にとって、本を出す段階では、一番正しい像だと思えるものになるわけです。しかしそれが、10年経ったらやっぱり変だなと思うかもしれないし、他の人が見たら、変だなと思うかもしれないし。そのちょっとした閃きとしか言えないところがあるんですけど。

クリオ：それは、かなり情報を蓄積して・・・

池上：そうですね。あるいはまた、もう少し勉強してみたりということや、重ねている間に、これとこれを組み合わせたらいいんじゃないかとか、こっちを強調したらいいんじゃないかとか、という感じですかね。

クリオ：閃きが一回ではなく、複数回あるということですが、二回目三回目の閃き、あるいは像の修正というのは、情報の蓄積によってのみ引き起こされているのでしょうか。それとも、何か別の・・・

池上：新しい情報が入るということもあるし、また、ある連続した物語として考えていく、あるいは論理・筋が通るかどうか、ということでも考えていくこともありますね。例えば、ロマネスク的な宗教運動の靈性が、ゴシック的なものになるとき、連続と断絶の両方から考えるわけですよ、もちろん連続している面もあるけど、質的に変化している面もあるから両方から考えなくてはなりません。その両方をどうやって説明するかということですよ。連続と転換の双方を常に視野に収めるということですね。

クリオ：池上先生の今回の著作というのは、かなり、時間軸を広く取っていらっしゃるんですが、あくまで中世という枠組みが設定されており、中世と近世の断絶が前提となっているように思います。一方、高山先生は、同じ時間軸での、空間的広がりの中で、国制の比較研究を行っていらっしゃるんですが、中世という時間的枠組み、あるいは中世と近世の連続／断絶について、高山先生なりのお考えを伺いたいのですね。

高山：「中世」という概念も「近世」という概念も、歴史家が作り出した概念であって、史学的的にみると後付けの要素が強いんですよ。時代区分の仕方も最初是非常におおざっぱでね。皆さんも知っていると思うけど、三区分法は、昔（古代）と今（近代）とその間（中世）という単純な分け方で、それがルネサンス期以降使われるようになり、今に至っているというだけのことからね。そのおおざっぱな時代区分の中で、細かい時代区分がなされたり、時代の意味付けが行われていくわけですね。僕自身は、これまでの「中世的なもの」とか「中世といわれているもの」の特徴というのが、必ずしもそうじゃないと思いつけてきているし、ある時代をさす言葉としては「中世」や「近世」、「近代」を使うけれども、それらが質を異にする固有の時代を指しているとも思っていませんからね。もちろん、中世と区分している時代から近世・近代と区分している時代にかけて、さまざまな変化があることは間違いありませんし、変化の大きな時期、変化の緩やかな時期というのはある。しかし、変化が時代の区分線前後に集中しているわけではありませんし、時代の区分線の前後で質的な転換を見ることも非常に難しいと思います。ある側面では、まさに、質的な転換が起こっているように見えるかもしれないけど、それがどこまで、その時代を代表する変化と見れるかどうかによって、それは変わってくるんじゃないかと思います。

しかし、時代の変化を言う場合、非常に気になるのは、どの範囲の人間集団の変化を問題にしているのかということです。例えば、フランス王国の変化なのか、西ヨーロッパの変化なのか、地中海周辺地域を含む変化なのか、世界全体の変化なのか。人間集団を限定できなければ、一体何の変化を問題にしているのか、わからなくなりますからね。だから、私の場合、変化のメルクマールとして重視するのは、政治的枠組みの変化ということになります。影響力があつて捉えやすい人的集団の枠組みだからです。これは、古代・中世・近代といった時代の枠組みとは全く違って、もっと無色なものです。政治的枠組み以外で重視するのは、人やモノが動く範囲、移動圏・流通圏とか、そういったものの変化ですね。現在私が大きな関心をもっているグローバル化の動きは、こちらの変化ですね。これは、とてつもなく大きな変化なんです。

クリオ：池上先生は、「中世」と「近世」に関しては、高山先生と少し違うパースペクティブをお持ちのように感じられるのですが。



池上：そうですね。その本（『ヨーロッパ中世の宗教運動』）を書き終わった時には、例えば靈性を中心に宗教運動を10世紀から14世紀まで見ていって、15世紀・16世紀になると、そもそも、同じ物語ではなく、別の物語として論じなければならないと思いながら、筆を擱いたわけです。しかしその後、もしかしたら、もうちょっと物語を敷衍できるかもしれない、と考え直しました。

数ヶ月前に早稲田大学で、『ヨーロッパ中世の宗教運動』の論評会（2007年9月23日）があって、その時に、僕の本の中では、靈性というのがロマネスク以降中世末まで、だんだん劣化していく、だんだん純粹なものから混濁した墮落したものへと衰退していくというふうに読めるけど、本当にそうなのか、という批判が複数寄せられました。あるいは、例えば、15・16世紀でも、イギリスの都市なんかでは、小教区や信心会での活発な宗教活動があるんじゃないか、という疑問をいただきました。いわゆる近世なり近代の宗教運動・宗教活動を僕の靈性史の観点から評価すると、中世に比べてだんだん墮落していくということになるんですけど、そうじゃない評価もありうるかもしれないって、もう一度考えてみると、場合によっては、もう一つの物語の筋を導入して、それで、中世から18世紀ぐらいまで続けて論じることができるかもしれないと思いつきました。

それで、今、考えているのが、儀礼というレベルの導入です。これは、『ロマネスク世界論』や『ヨーロッパ中世の宗教運動』における僕の初期中世に対する低い評価、その見直しとも関わっています。つまり、宗教的覚醒が10世紀末に起こりますが、その前の初期中世というのは、なかば異教じみた冴えない時代だったと考え、そう書くと、初期中世の人が怒るんですけど、まあ、これまではそう書いて、そう思ってきました。ところが儀礼というレベルを設定して、そこに、宗教活動というのを絡ませながら考えると、初期中世の重要性が一気に高まるんですね。しかもそれが、中世を超えて近代にまで——現象の表面に力強く表れるか、あるいはその下に温和しく沈んでいるか、という違いはあっても——ずっと続いていく豊沃なる地下流だとも看做せそうなのです。そういうファクターを入れて、もう一回考え直せば、ヨーロッパ中世ではなく、ヨーロッパの前近代の宗教運動通史みたいなものを書けるかもしれない。

そういう風に考えると、例えば、ジャック・ルゴフは「長い中世」という概念を考案して、『煉獄の誕生』なんかで、例えば4世紀からフランス革命までの長いタイムスパンで、煉獄觀念の誕生と展開・推移を論じているわけですけど、それぐらい長く時間軸をとって論じることが、今まで可能じゃないと思っていたテーマでも可能かもしれない。そうすると、18世紀まで「中世」ってしてしまってもいいかなと思わないではありません。そうでないと、百年前に比べて、もう時代は百年進んでいるわけですし、近現代がどんどん増えていくわけですよ。それでいて、古代と中世の長さは変わらず、近現代だけが、百年も二百年も長さが増えていくということになりますよね。やっぱり、古代や中世に割り当てる長さも、時代によって増やしていくべきでしょう。増やしていくと言うと変だけど、そういうこともありえるんじゃないかと思います。例えば、4世紀から18世紀くらいまでを「中世」と呼ぶような時代が、そのうちやってくるかもしれません。だから我々の「西洋中世学会」もそれくらいまで含めて、皆さんに参加してもらいたいと思っています。僕が、この学会の準備委員の勧誘で驚いたのは、他のディシプリン（文学や美術史）では、時代区分が細かくて、相互に別の時代だと思っているらしいことです。美術史で15世紀をやっている人は「私は中世ではありません」といって、なかなか引き受けてもらえませんでした。つまりルネサンスだから中世ではないと。でも、歴史学だと、最近では、中世の末から近世までという

問題設定が、とくにドイツ史なんかでは非常に多いわけで、16・17世紀でも中世の仲間という意識がかなり強いようで、そういう人たちは皆、参加の意思を表明してくれました。ディシプリン・分野によって、時代の考え方が違うということを、随分、感じましたけど。

## (2) 教育者として

クリオ：次に大学での教育に、お二人がどのように関わっていらっしゃるのかについて伺いたいと思います。大学に求められるものも、人文社会学が置かれた危機的状況、社会からの要求の変化に応じて変わってきていると思うんですけども、そういう中で、まず、研究者を目指す学生を想定してどのような意図で、どういう形式・内容の授業を行っていらっしゃるのかについて伺いたいと思います。

高山：それではこれは僕から。僕の場合は、大学院の授業と学部の授業の違いをかなり意識しています。大学院の場合は、修士で終わる人も含めてですけど、基本的には、研究者になるということを前提にして教育を行っています。そのために、学生に求めていることが二つあります。一つは博士課程に進学したら必ず留学するという。可能なら向こうで学位を取ってきてほしいと思っていますが、そうでなくとも、最低限海外の大学院で学び、向こうの学者集団と交わってきてほしいと思っています。日本の中だけにいるとどうしても、自分の世界が日本になってしまいます。自分が相手にする人たち、自分の論文の読者が日本人になってしまうんです。もちろん、日本語で書くということも自明の前提としてしまいます。しかし、私が大学院生たちに期待しているのは、国際的に評価される仕事をきちんと出せる研究者になるということなんですね。そのためには、海外である種の洗礼を受けなければならない。国際的なレベルで自分の仕事が評価される、それが当たり前の場合にとにかく身を置いてほしいということなんですね。ということではまあ、自分は日本人だからという甘えを棄てなさいということですけど……。だから、必ず留学しなければならない。ただ、これはもう大学院生たちにとっては当たり前のことになっていますね。留学しないと一人前の大学院生ではない、という空気がありますから……。

大学院生に求めるもう一つのことは、学生時代に西洋中世に関する幅広い知識を身につけるとことです。これは、自分の仕事が国際的に評価されるような研究者になってほしいという思いともつながっているのですが、西洋中世史のプロの研究者である以上、自分の研究テーマだけでなく、西洋中世に関する幅広い知識をもつことが当然だと思っているからです。彼らが、大学院を終えたあと、一人の研究者として、一人の大学教員として活躍するためには、自分の研究対象を超えた幅広い知識が必要ですからね。そのため、大学院の授業では、中世ラテン語史料を読んだ一時期を除いて、イタリア、フランス、イギリス、ドイツ、スペインの中世の君主国、教皇庁などの統治制度を比較することにしています。一つの君主国に1年かけますので、一回りするのがだいたい6年となります。最初に1年間の授業予定(シラバス)を作り、担当を割り振りますが、扱う文献は、フランスを扱う場合にはフランス語が多くなりますし、ドイツを扱う場合ならドイツ語が多くなります。授業では、まず担当者が報告を行い、それに対する質問、そして、議論に入ります。

クリオ：学部のゼミについてはどうでしょう？

高山：学部のゼミについては、まず、学生に求めるものが大学院生に求めるものとは違うということをお初めに言うておかなければならないでしょう。学部の学生に期待するのは、まず第一に、歴史学がどのような学問であり、どのようなやり方で過去を研究・認識しようとしているのかを知ってほしいということです。第二に、西洋中世史の分野でどういう事柄が研究者の関心事になっているのかを知ってほしいということです。そして、第三に、情報をどういうふうにして手に入れ、どういうふう処理して、そして現実をどういうふうに見るかということをお学んでほしいということです。学部の演習では、一次史料を使いませんけれど、研究者の書いたものを材料にして、情報を相対化する術をお学んでくれることを期待しています。この演習では、2週間で一つのテーマをやり、2年間で中世の立ったテーマを終えることにしています。

クリオ：大学院のゼミでこういう能力を養いたいとか、そういうことはあるんでしょうか？

高山：養ってもらわなければならない能力はいっぱいあるんですけど……。僕のおやっている授業では、ヨーロッパ中世のいろいろな問題を知ってほしいし、基本的な知識をお身につけて欲しい。僕らはそういうことをあまりやってこなかったから……。自分の専門は非常に良く知っているけれど、ちょっと地域や時代が変わると、もう全然分からないというのでは困りますよね。これから先、大学教員になるのであれば、イングランドの12世紀の専門家であっても、フランスの14・15世紀や、イタリアの8・9世紀とか、それぐらいは分かっていると困るわけですね。それで、意図的に西ヨーロッパの主だったところを扱うというような授業にしているわけです。

クリオ：講義に関しては？

高山：講義は二つの種類がありますけれど……。この二種類の講義を、毎年、行っています。一つは、自分の研究に関わる講義、伝統的に行われてきた特殊講義ですね。例えば、中世フランスの制度史に関する講義、それから中世シチリアに関する講義、そして、中世地中海に関する講義などがあります。私はこれらのうちのどれか一つのテーマを、冬学期に話すことにしています。もう一つは、入門講義、ヨーロッパ中世史の概説ですね。こちらの講義を夏学期にしていますが、中世前期と後期に分けていますので2年で1サイクルです。これは、ゼミに合わせたスケジュールとなっています。つまり、ゼミでヨーロッパ中世史の前半をやる年には講義も前半のトピックを扱い、後半をやる年には講義もそれに合わせるということです。

クリオ：情報をどう扱うかについてを除けば、学部のゼミと講義はセットになっていると？

高山：そうですね。多くのトピックを扱いますが、講義と演習が連動していれば、より深く、また、効率的に学べるのではないかと思いますので……。

クリオ：池上先生はどうでしょう？

池上：僕は駒場で、1・2年生にはフランス語と地域文化論、あるいは全学ゼミ。3・4年生には地

域文化研究学科でフランス歴史社会論、それからヨーロッパ形成史を教えています。大学院では一種のゼミをやっているわけですが、大学院で僕が指導教員になっているのは地域文化研究の特徴として、必ずしも歴史だけでもなくて、中世だけでもありません。17世紀フランスの宗教史をやっている人もいるし、あるいはブルーストとかフローベールをやっている人も僕が何故か指導したり、20世紀のベルギーの移民運動をやっている人も指導したり、まあいろいろです。全員を満足させるゼミというのはちょっとありえないので、ゼミに関しては中世史をやる人用に、殆ど中世のラテン語のテキストを読むというのを基本にしてやっています。それでテキストはなるべく面白そうなものということで、毎年変えているんですけど、今年は「ミラビア」の一つでアレクサンドロス大王の手紙というのがあるんですけど、アレクサンドロス大王がアリストテレスに宛てて書いたという中世の偽文書で、それがやたら面白いんですが、それを読んでいません。他にはギョーム・デュランの典礼論とか、ルネサンスの学生がいるときにはピウス2世の旅行記、メモワールとかいろいろです。まあそれは、中世のラテン語を読む能力を身につけさせるということですね。しかし、半年に一回それぞれの院生が自分のやっている研究なり、自分のテーマに近い論文や本の紹介なり、まあ両方の場合もあるんですけど、そういう会を朝から晩までやるというのを各学期にやっています。また今月末にあるんですけど、そんな感じですね。

それから3・4年生、まあ2年生の後半からですけど、フランス科へ進学する学生を中心に地域文化研究学科でやっている授業は、年によって違うと言えば違うんですけど、フランス前近代の歴史をやるというのが一つで、割合フランス語のテキストを読むということが多くて、今年はある『記憶の場』(Les lieux de mémoire)で日本語になっていないものをいくつか取り上げて、フランス史について考えるというのをやりました。後はヨーロッパ形成史という講義で、それから1・2年生向けの地域文化論という大きな講義もあるんですけど、それらでは自分が今研究している、興味を持って調べていることを話しています。まあ、今やっていることなので、全然まとまりのない話になることも多いんですけど。あのインターネットのブログみたいなのがあって、「池上先生は何を喋っているのかよく分からない。いろいろ業績はあるみたいなんだけど」という風なことを書かれていて、気をつけて喋ろうと思ってるんですけど。

駒場の学生は必ずしも駒場の大学院に行くわけではなくて、高山さんの所と申しますか、本郷西洋史に僕の指導した3・4年生が進学するというケースもあります。それは当人の希望通りにしています——まあ当然なんですけど——。確かに駒場にもいい面はあるんですけど、やっぱり史料や雑誌、文献の量が駒場には少ないということ、それから後、今のところ仲間が少ないということですか、その辺を克服して駒場も本郷に並び立つ様な西洋中世史研究のメッカにしてもいいんですけど、それよりはむしろ、今後は本郷と駒場が、一緒になって何かやった方が効率的だということもありますよね。まあその辺、大学の制度についていろいろ言い始めると疲弊するだけですので、もう大学は諦めて西洋中世学会の方で、大学の外で頑張ろうという気も多少あるんですけど。

クリオ：これまで大学での教育について伺ってきましたが、大学教授に求められているのは、学内だけではなくて学外に自分の研究内容を発信していくことのように思われます。その際にお二人が気をつけていらっしゃることを伺えればと思います。

高山：学外の方たちに自分の研究に関することをお話しするっていうのは、講演とかテレビとか

新聞、それから一般的な雑誌とかですかね。そのような場で意識しているのは、自分の話の内容と今の日本人との関係です。講演をした後の質問で一番多いのは、何故、私のような研究をしているのか、何故関心をもったのかというような、研究対象と日本人研究者である私との関係であり、話の内容と関連した現在の問題に関する質問なんです。だから、話の中身が今の日本や私たちとどう関わるのか、どういう意味をもつのかについての私の考えを、例えば、過去の現象を知ることによって、過去に対する認識がどう変わるのか、現在起こっている事象がどう違って見えるのかというようなことを、できるだけ入れるよう努力しています。

池上：一般公衆とは何かということになるんですけど、まあヨーロッパ、ヨーロッパ中世の歴史に多少なり興味のある人に伝えるときは、最新の研究動向を取り込んだ紹介みたいなのをできればいい。まあ、一般の興味を惹きそうな、それこそ魔女とか、そういう話をすることも多いんですけど、その場合でも昔考えられていた魔女ではない最近の研究に則ったようなものが伝えられたらいいな、ということですかね。

それでこれはなかなか難しいんですけどローマ史というと塩野七生になってしまったり、ルネサンスというとそれこそ『ダヴィンチ・コード』になっちゃったり、これはもうすごい人気のものを、我々地味な歴史研究者の力では排除できない。まあ排除する必要はないのかもしれないけれど、それだけが広まってしまうのは、困りますよね。それは修正しながらいろんな人に分かってもらうということもほんとはやらなきゃいけない。阿部謹也氏と木村尚三郎氏のお二人というのはそういう点で偉かったなというところがありますね。あの二人に代わる人は出てきていないわけですから、非常に分かりやすく面白く語れて、書いて、しかも新しい内容のものを一般向けに伝えられるっていう、まあそういうのも僕自身、一部では目指したいんですけどもなかなかうまくいかないですね。

それからもう少し一般公衆というより教養人というか、そちらに関しては現在、いろいろやりつつあって、これからもどんどん企画していこうと思っています。これは出版社とのコネをフルに使って、出版社をちょっと誤魔化しながら引き込むっていうようなことなんですけど。ここで宣伝しておきますと、この秋から、『ヨーロッパの中世』という叢書が岩波書店から出る予定です。僕と首都大の河原温氏が編集責任者となった八巻本で、全てヨーロッパ中世に関わるテーマでまとめています。この8冊全体で、ヨーロッパの中世、まあ主に社会史・文化史的視点なんですけど、その新しい研究成果と新しいビジョンが専門家集団以外の読者層にもかなり広まるかな、と期待しています。しかも原則としては一人一冊書き下ろしで、「講座云々」というようなつまらない論文集の集まりではありません。これも、今まであってもよかったけど存在しなかったシリーズですよ。西洋史では、古代史にもこのようなシリーズはないし、近現代史でもないのではありませんか。それを、僕と河原さんが必死で企画書を書いて、出版社を説得して企画が通ったという、それは大きなことだと密かに誇っているんですけど。もう一つ、僕はルネサンス期の人文主義にも大いに興味がありますが、イタリア・ルネサンス期の人文主義者の著作を集めた、巨大な二巻本を名古屋大学出版会から出す予定です。それは20人ほどのイタリア15・16世紀の人文主義者の著作を——全訳と抄訳がありますけど——それをまとめて翻訳しようということで、これも今までないと言っていい企画です。そういう常識から考えると、このご時世、出版の企画として成り立ちそうもないと思えるけれど、情熱的に、うまく説得すると出版社も乗ってくれて、成り立つというものが、中世学的なものには多数あると思うんですね。その辺に、僕の出

番もあるかなというのでやっているんですけど。

クリオ：今、阿部謹也先生や木村尚三郎先生のお名前が挙がりましたけれども、そういう意味では学外に対してとるべき、あるいはとるよう求められている態度というのはそんなに変わってはいないという風に認識されているのでしょうか？

高山：阿部先生や木村先生の時代と今との間でということですか？・・・いや、僕はかなり違っていると思っています。今、歴史家はもっと発言しなければならぬし、発言する人が多くてもいいんじゃないかと思っています。大きな時代の変り目ですから、歴史家は、将来に対する指針になるような長期的なビジョンを出すことを、社会から求められているんじゃないでしょうか。でも現実には、歴史家の発言は殆ど聞かれませんか。評論家や経済の専門家や政治学者、こういった人たちが歴史を語り、現在の変化についての発言をされています。本当なら、専門家として歴史を研究してきた歴史家が、時代の変化についての発言をするのが社会にとって有益だろうと思うんですけど、現実には全然そうならないと思いますね。

今のような時代の変り目にこそ歴史学の存在意義を認めてもらえるはずなのに、現実には、社会からは歴史学は不要だというメッセージが出され続けているようにも思えます。歴史研究者たちは、大学の先生であれば国立・私立を問わず国からのサポート、つまり、税金によって養われていますし、科学研究費のような、やはり、税金を使った補助金をもらって研究をしてくれている。研究に対する補助金は趣味に対する補助金じゃないわけですから、もらう側は、義務を負っているという自覚が必要だと思います。一つは、学問の各分野を推進すること、つまり、オリジナリティのある研究成果を出して、人類の知的共有財産を増やすための補助金だということですね。もう一つは、社会が必要としている情報を、社会に対してきちんと出していくことだと思います。

残念なことに、今回のテーマの一つである人文学の危機は、かなり深刻のように思えます。私自身、この数年間、大学外で人文学の問題に深く関わってきました。一つは、皆さんもよく知っている21世紀COEプログラムですが、人文科学の分野別審査・評価部会専門委員として2002年の選考から2007年の事後評価まで、足かけ6年間、関わってきました。また、日本学術振興会に新しく創設された学術システムセンターの研究員（人文学）として、2004年から2007年までの3年間、日本学術振興会の事業全般に関わってきました。2008年からは文部科学省の科学官として、同省の学術、とりわけ人文学、に関する重要事項の企画・立案に参画することになっています。このように、ここ数年間、人文学全般を考える機会・役割を与えられてきたんですが、世の中には人文学が必要ないと思っている人たちが多いということに気付かされました。一般の人たちもそうですし、意志決定をする立場にいる人たちもそうです。大学の先生でもそうっておられる方が結構いらっしゃいます。だから、私たちが何もしなければ、間違いなくこれから先も人文学は縮小していくでしょう。大学であれば、人文学関係のポストは減るでしょうし、予算も減らされていくでしょう。

それで、どうしたらいいかということなんですが・・・。僕らは僕らなりに人文学がいかに大事であるかを訴えていかななくてはならない。それも上手に訴えないといけない。人文学が、社会や個人に対してどういう意味を持っているか、日本の多くの人たちにとって役に立つということを、きちんと説明することが必要だと思います。役に立つというのは、短期的な利益ということ

ではなくて、人間が生きる上で必要なもの、あるいは自分の生き方を支えてくれるもの、長期にわたって支えてくれるものであるということをきちんと説明して行かなくてははいけない。そのような努力がこれまではあまりやられてこなかったんだと思いますね。いろんな場で理系の先生方と一緒になりますけれど、彼らはそのような説明が非常に巧いですね。小さな虫の研究をしていますが、その研究がどういう意味を持つかを上手に説明されるんですね。

私たちの分野だと、自分の研究の意味を説明するためにエネルギーを割く人が本当に少ない気がします。自分の知り合いでも、「いや、好きでやってるんですよ」とか、「我々は虚学をやってるんですよ」ということを平気で公言される方が少なくないんですよ。ただ、そのような発言は、これまで制度に保護されてきた人の甘えにすぎないように思います。そういう発言が積み重なることによって、私たちのところに来る予算は減り、ポストも減っているというのが現実だと思いますね。だから、私たちは、かなり意識して、歴史学や人文学の意味を説明していかななくてはならない。私たちにはその責任があると、特に若い世代に対する責任がね、あるんじゃないかと思っています。

クリオ：今、高山先生から、西洋中世史研究の日本社会における意義とは何かという点についてお話しいただきましたが、池上先生はその点に関してどのようにお考えでしょうか？

池上：10年前の『西洋中世史研究入門』の序文にも書いてあるんですけども、それがますます該当する様になったと思うんです。まあ誰一人としてこの先日本がどうなるか、世界がどうなるか分からない昏迷の時代になっていると思うんですけど、その時に歴史を学び、歴史を遡って見るということ、それは単に歴史上のある事件の教訓を得るということではなくて、歴史的な想像力というのを涵養するというか、そういうことが重要な時代になっていると思います。それで、この西洋中世史というのは日本人の今にとって、空間的にも時間的にも遠いけれども、でも独特の魅力のある時代であって、その時代で想像力を働かせながら研究していくというのは非常に意味があると思うんですね。それは高山さんのような人が、理系の人が集まる会議で、それがどう実用的に役立つかというのを説明するのは難しく、それには一種のレトリックが必要だと思うんですけども、まあ、そういう努力をしなければいけないのかもしれないですけど、僕はどう考えてもそうした能力に乏しいので、別のところで頑張ろうと思っています。

本当にここ数年来、大学での人文学、西洋史の置かれた状況は厳しくて、これからも厳しくなる一方かもしれない、どうしたらこれを押しとどめることができるのかなという暗澹たる思いもありますね。だからむしろ、大学を見棄てる訳じゃないけど、大学の外でこういう学会を、つまりこれは大学にポストを持つ研究者だけの集まりではなくて、一種の巨大な寺子屋的な要素もあるんじゃないかと思うんですけど、このような学会に求められる役割は、非常に大きいのだと思います。大学のポストを確保して大学の教育を衰退させないためにどれだけ頑張ればいいのか、政府とか文科省に働きかける責務が我々にはあるのでしょうか、どうなんでしょう、その辺は高山さんとずれがあるのかもしれないけれど。これは一種の文明史の巨大な波の満ち干の一コマだからしょうがない、という考え方もありえます。確かに19世紀に歴史学が誕生したとき大学に歴史学の講座はゼロだった。フランスなんかミシュレの時代にゼロだったわけですから、百年二百年単位で考えれば、日本でも世界でも、ふたたび人文学・歴史学が脚光を浴びる日もくるかもしれないので、ほっときゃいいのかも知れないですけど、でもやっぱりほっとけないで

すから、まあその辺は何とかしなければというところはあるんですけど。

高山：皆さんは、第二次世界大戦前にエール大学の歴史学教授だった朝河貫一という人を聞いたことがありますか。彼は、あるインタビューで「歴史とは何ですか」と聞かれたとき、「歴史とは熱なき光である」と答えたんですね。僕はそのことを知ったとき強く共感を覚え、今でもまったくそのとおりで思っています。「熱なき光」とは、私たちに現実の世界を見せてくれるだけの光なんですね。この光には熱がないから、周りの者に働きかけたり、直接影響を与えることはありません。歴史学も、能動的に周りの人や社会を変える学問ではなく、過去と現在をあるがままに見る学問である、と……。そういうふうに彼の言葉を理解したんですね。歴史学が見ることに徹する学問、過去から現在までをとにかくあるがままに見ようとする学問であれば、より客観的に自分たちの立ち位置を照らし、将来に対する指針を示してくれるんじゃないか、そして、それが歴史学がもつ最大の長所ではないかと思っています。

クリオ：ありがとうございます。それでは時間も迫って参りましたので、これで対談を終了させていただきます。今回は中世学会の話から始まって、お二人の歴史家としての方法ですとか哲学のようなものを伺うことができました。お二人は対照的な部分を多く持っていらっしやいましたけれども、そのお二人が共同で中世学会を設立されるということは、今後の中世学の発展の上で触媒の役割を果たすのではないかという感想を抱きました。どうもありがとうございました。

(池上俊一・東京大学大学院総合文化研究科教授・西洋中世史)

(高山博・東京大学大学院人文社会系研究科教授・西洋中世史)

2008年3月15日

高山邸にて

聞き手：野々村隼、向井伸哉、加藤玄、  
藤崎衛、阿部ひろみ、小川祐樹